

皆さま、本日はこのような名誉ある賞をいただき、心からの感謝を申し上げます。

この賞を本当に受賞するに値するのは、バンクミケルセンが描いた世界を創り、それを体現しているホワイトハンドコーラス NIPPON のこどもたち、そしてその保護者と仲間たちです。今日は子どもたち、日々一緒に闘っている献身的なスタッフ、そして応援者の皆様に代わって、私はこの特別な賞を大切に受け取りたいと思います。

バンク・ミケルセン氏がかつて世界に問うたのは、「すべての人間に、普通の生活を送る権利がある」という、とてもシンプルで力強いメッセージでした。

本日のハッセさんの非常にわかりやすいご講演、ウィットに富んだ温かいメッセージで通訳までしてくださった千葉先生、福島先生、そして銭本先生のお話しには大変感銘を受けました。「普通の生活」が何を意味するのか、理解が深まったように思います。様々なレベルで私たちに「人間の生活」とは何か、わたしたちは生きる権利として、そもそも人生に何を求めるのか考えさせてくださいました。

私が率いるホワイトハンドコーラス NIPPON は、音楽によるソーシャル・インクルージョンを掲げています。関わっている子どもは、聾者、難聴者、知的障害、弱視、自閉症、難病、車いすユーザー、障がない子どもなど様々です。手話で歌う「手歌(しゅか)」と声で歌う「声隊」がひとつの舞台をつくる、世界でもユニークなインクルーシブ合唱団です。もともとはベネズエラで始まりました。この活動は、私が音楽家として聾者と出会った一つの出会から始まり、豊かな出会いの連鎖となって多くの保護者、こどもたち、関係者、そして私自身も成長させ、変容させてくれました。

日々の練習は実に地味なもので、この活動を支えるための資金集めや事務的な業務も膨大です。毎日本水を飲んで汗と冷や汗を流す日々ですが、ここで学んだことは歓喜の涙にもなっていて、もう後戻りできない人生の大きな宝です。このことにおいて、私は一生子どもたちに感謝し続けなければなりません。

私たちの活動が目指す未来は、そこに関わる子どもたちの声なしには創れません。

例えば、耳の聞こえない子どもがぶつかる「偏見」の壁、目の見えない子どもが苦勞する社会の壁、耳を傾けると知らなかったことや反省すること、変えていくべきことが多くあります。それと同時に長い長い時間を経て、障害者の当たり前の権利を戻すために闘ってこられた先人たちの知恵や、志に感謝することも多くあります。日本においては 60 年以上手話が禁止されていた過去もありますが、今年は初めての国の法律として手話施策推進法が制定されました。バンクミケルセンの思想を日本にも広めてくださっている千葉さま、佐藤さまにも、団体を代表して心からの敬意をお伝えしたいと思います。

バンクミケルセン賞という立派な賞をいただいたからには、私たちの団体がどんな未来を創ろうとしているのか考える責任があると思いますので、僭越ではございますが、ここで少し時間を頂いて子どもたちとの歩みを振り返りご紹介したいと思います。

※動画

子どもたちと「音楽」を愛することを通して、私はまた人間を信じられるようになりました。音楽は太古の昔から人間の非言語コミュニケーションとして「つながり」をつくる役割を担ってきました。「つながり」には、さまざまな層があります。宇宙と人間、自然と人間、神と人間、内省の意味では自分自身とのつながり、亡くなった人や過ぎた過去に寄せる思いもあれば、未来への願いもあります。また楽譜を介して昔の人の想いに触れるといういみでは時間を超えたつながりをもたらします。愛情、悲恋、怒り、喜びも人と人の間でゆれうごく繋がりを表しています。

この繋がりは、すべての人に与えられたものです。ヘレンケラーは「目が見えないことは人と物とを切り離す。耳が聞こえないことは人と人とを切り離す」という厳しい言葉を残していますが、その厳しい前提の前においても私たち一人一人は切り離されたものをつなぐ力を持っています。

子どもには夢を描く権利があります。「就労支援施設」で幸福に働く障害者もいらっしゃると思いますが、子どもの夢は施設の外にもあります。一步一步現実にしていくことは可能だと、保護者や先生が信じることも必要です。

高校生から参加したろう者の男の子は、国際機関で働く夢を担任の先生に相談すると「君は聞こえないから英検もとれないし、その夢は無理だ」と言われました。（余談ですが、今は英検にも合理的配慮があり聞こえなくても英語の能力を測れるシステムがきちんとあります。）悔しい思いをした彼はベートーヴェンのごとく諦めることなく英検を目指し、見事に合格しました。彼は国連での演奏会に参加し、今も海外で仕事をする夢に向かって大学で一生懸命学んでいます。「ホワイハンドコーラスに参加するまで自分の意見を聞いてもらったことはなかった」と言いましたが、それは他の場所でもできるはずです。

子どもたちには自分の意見や考えを表現する権利があります。

そして私たちが実現したいのは「音楽を学ぶ権利」がみんなにあるということです。

日本中の学校で、音楽室には白い手袋があって聴こえないこどもや、声の出ないこどももいっしょに歌うことが「ノーマル」になったらいいなと思っています。音楽はみんなのものです。

バンクミケルセン氏は、教育についてこのようにおっしゃったと伺っております。

「子どもにとって最大の教育は、“ともに過ごす経験”である。」

「ノーマライゼーションとは、人生の質を高めるための道であり、自由と選択のための闘いである。」

本日のセミナーでは障害者の視点で語られることが多くありましたが、インクルーシブな現場を作ってきた立場で感じていることをお伝えしたいと思います。

強調したいのは「障害のある」子どもだけでなく、すべての子どもにとって「ともに過ごす」ということは最大の教育になりうるという点です。

インクルージョンは「障害のある子どものため」に「障害のない人たちが頑張るもの」ではありません。ここで「障害のない子ども」と苦し紛れに使っているのは「健常者」という言葉を使わないと団体内で決めているからです。「常に」「健康な」人はいないという前提で、この言葉は使わないことにしています。

ホワイトハンドコーラスには障害のない子どもたちが4割在籍しています。制度上は「障害のない」子どもですが、他者からの助けが必要ない子どもはいません。また反対のことも同様におきます。すべての子どもがお互いに自分の魂の一部を差し出し、交換しあって、子どもも、保護者も成長します。受験で心が折れてしまった子ども、離婚した親の傷を背負った子どもみんなそれぞれ、人生の苦難と喜びを生きています。

一つのエピソードをお話しします。普段子どもたちは、目の見えない子どもを子ども同士で手引きしています。ある舞台で、Aちゃんは全盲のIちゃんの手引きをしていました。すると、通りかかった別の方が「あの子は目が見えないから立ち位置を覚えられないよね」と話していたのが耳に入ったそうです。

Aちゃんは涙をうかべ、怒り心頭で私のところに来ました。「彼女は誰より完璧に歌えているのになぜそんなひどいことを言われたいいけないのか！私は絶対に、立ち位置を間違えないように手引きします」と言いました。Iちゃんの痛みを、Aちゃんは自分のこととして受け止めるようになっていたのです。その晩気になってIちゃんのお母様にお電話をすると「そのことなら、娘は全く気にしていませんよ。」というのです。普段Iちゃんは、白杖を持って電車で学校に通っていますが、白杖を見て「あの子は、障害者だよ、あまりジロジロ見ない方がいいよ」などという声が日常茶飯事で聞こえてくると言います。でもIちゃんは、自分の身体は自分のものとしてどんなことを言われようと「私はわたし」という姿勢で生きています。そのことを手引きしていたAちゃんとAちゃんのお母さんが知ると、後日Aちゃんのお母様から長いお手紙をいただきました。そこにはこんなことが書かれていました。

「私は生まれた時から、子どもの成長を心配して〇ヶ月で座った、立った、話したとチェックしながら子育てをしていました。小学校にあがると、〇〇くんは英語が得意、〇〇ちゃんは同じスイミングに通っているのにもっと早く泳げるという風にいつも誰かのことと娘を比べながら子育てをしてしまいました。気づいたら娘は自信のない子どもに育っていました。「私はわたし」という姿勢で生きている同年代

のIちゃんの姿から学んだことは計り知れません。本当に手引きをしてもらっているのは私たち親子の方でした。
というお手紙でした。

もし、AちゃんがIちゃんに出会っていなかったら、彼女の人生は別の色になっていたことでしょう。

「障害」という言葉の意味を考えさせられます。

障害者施策は、社会や生活、文化の面で虐げられてきた「障害当事者」の側で語られるべきです。障害者権利条約のモットーである Nothing about us, without us(私たちのことを私たち抜きに決めないで)という言葉の通りです。しかし、それ以上に紙の上では「障害」のない人たちも、身体の制約があり全ての人が死ぬことにむかって生きています。今わたしの義母は重い認知症を患っていますが身体が元気でも、精神的に他者のことを想像できる状態ではなく、老いていく過程において、私たちが社会や人生の「障害」、体の変化と向き合っていくことから逃げることはできません。この世の誰一人としてチクタク時を刻む時間から自由になれる人はいないのです。世の中のすぐれた芸術作品もすべて、生身の人間が、身体、時間、空間の制限の中であらい、魂を自由に解き放ってきた中で生まれた「生きていることの叫び」だと私は思います。

その制限された人生の中で、私たちは生きることを意味を探してしあわせや喜びを「つながり」のなかで見出しているのではないのでしょうか？

そのしあわせや喜びは、表情のうごかない人の中にもあり、言葉をはなせなくてもその人自身の唯一の魂の輝き、尊厳として確かにあるものです。

沖縄で支部を立ち上げたとき、ある保護者がうちのこどもは無理かもとおっしゃりながらお子様をつれてきました。彼女は難病をかかえていて、挨拶などの言語のやり取りや目を合わせるのは困難な状態でした。彼女はずーっと同じ言葉を繰り返しさけびながら練習中！時間部屋をぐるぐる歩いていました。他の子どもたちも私も気にすることなく「にじふらい」という歌を練習し続けていました。練習中、活動には全く参加しなかった彼女でしたが、部屋から出なかったというのが、一つのサインでした。翌週も彼女は来てくれました。その次も彼女は来て、ぐるぐる歩き続けました。3回目には繰り返していた言葉が「にじふらい」という言葉に変わっていました！

数ヶ月後、本番を迎えたのですが、直前で体調を崩した彼女は舞台に上がるのを断念。ところが本番の日客席に現れた彼女は、アンコールで突然舞台にあがりみんなと一緒に歌い出したのです！しかも歌詞を完璧に覚えていました。観客にいた人たちからは、私たちと彼女の関係性がわからなかったかも知れません。しかし私たちにとっては、コンサートのハイライトとなりました。

その場にいた先生。子どもたちや保護者はボロ泣きです。Kちゃんがいっしょにうたった！

彼女の喜び、表現は、私たちのよろこびでした。彼女は自分の言葉で、その感情を言語化しないけれど、音楽という解放を通して彼女の魂の喜びを私たちは自分のこのように喜ぶ経験をさせてもらいました。

喜びの内包。

これは、「支援する」「支援される」という固定化しがちな障害者施策のなかで見落とされていることなのではないかと思います。

「子どもにとって最大の教育は、“ともに過ごす経験”である。」
という言葉には、制限の中で生きるすべての人間にとって、「だれかの喜びを自分の喜びにする」という大切な教えがあるように思います。

インクルージョンはだれのため？ということを考えて時、
ノーマライゼーションの未来には、もっともっと大きな人間の幸福への道があるのだということ、人間の未来へのヒントがあることを真剣に考えるべきなのではないかと思います。

現代世界には、構造的な差別、政治的な分断、オンライン上には不安からくる猛烈な攻撃を毎日のように目にし、国際政治の舞台では戦争が絶えません。子どもたちに残す未来は一体どんな世界になるのか、心配で眠れなくなるときがあります。

そんな時、思い出すのは 54 万年前の人類の化石です。そこには、生まれつき奇形で頭蓋骨から重度の障害を負った人が少なくとも 30 年以上生きたという証拠が残っています。自分で歩いたり、食べ物を採取できなかったであろうその人が生きながらえたというのは、その人をケアし続けた人がいたという証でもあります。人間は本来そういう生き物なのです。

その人たちの声を聞くことはできませんが、きっとその瞳にはよろこびがあり、眼差しと眼差しの間には「つながり」があり、けっして一方的に誰かが「支え続けた」だけではない関係、つまりお互いの存在が励みになり支えになるという関係があったことと想像します。

出生前検査で、遺伝子以上が見つかり不安や無知から堕胎をしたり、優位とされる体の特徴を使った遺伝子操作も今後より身近になっていくのかも知れません。しかし、どんなに操作をしたって、所詮人間はみなどこか欠けているからこそ、つながりの中で生かされ、より人間らしく、より幸福な人生を歩めるのではないのでしょうか？

本日は、デンマークでの取り組みを見て、54 万年前に遡らずとも希望があることを見せていただきました。

先ほどの動画にもありましたように、このような歌詞があります。

もし、私にチャンスを与えたら

もし、私を育ててくれたら

私をありのまま、受け止めてくれたなら

私は自由になれる

私たちは、舞台から未来を創ることに挑み続けたいと思います。子どもたちはノーマリゼーションの精神に、「義務」ではなく「喜び」と「自由」があることを体現しています。その姿を多くの人に見てほしいと思います。「何かが欠けている」と悲観して明日に希望がもてない、保護者や子ども、がんじがらめになった大人たちに、あの子達の姿を見てほしいと思います。

そして今も病院の中や、無理解や、偏見、社会の制約の中で孤独な闘いに挑んでいる多くの子どもたちに、当たり前の人間らしい「つながり」を生み出せたらと思います。

みなさまと一緒に歩めることをとても心強く思います。これからも、ともにバンクミケルセンの夢を叶えていきましょう！

本日はありがとうございました！

ホワイトハンドコーラス NIPPON 創始者

コロネりか